

# 病害虫発生予報 第6号（9月予報）

和歌山県農作物病害虫防除所

## < 予報の概要 >

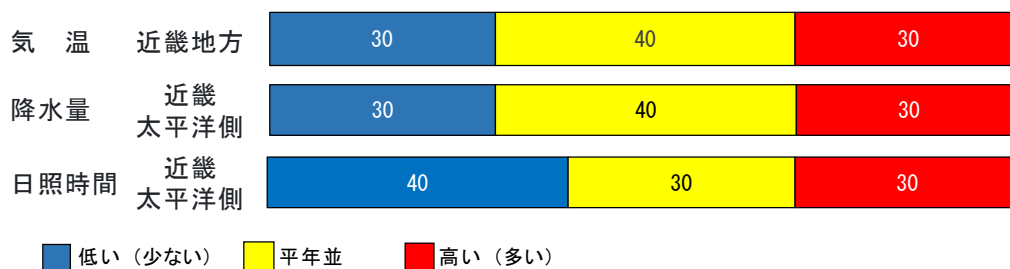
作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	いもち病	やや多	野菜・花き全般	ミナミキイロアザミウマ	やや少
	紋枯病	並		ミカンキイロアザミウマ	並
	トビイロウンカ	並		シロイチモジヨトウ	並
	イチモンジセセリ	並		ハスモンヨトウ	やや多
	コブノメイガ	やや少	カンキツ	黒点病	やや多
	斑点米カメムシ類	並			かいよう病
トマト・ミニトマト	黄化葉巻病	並		ミカンハダニ	やや少
				チャノキイロアザミウマ	やや少
ダイコン	コナガ	並	カキ	炭疽病	やや多
ハクサイ					
キャベツ				円星落葉病	並
野菜・花き全般	アブラムシ類およびアブラムシ類媒介のウイルス病	並		角斑落葉病	並
	ハダニ類	並	果樹全般	カメムシ類	並～やや多

## 気象予報

### 近畿地方 1か月予報（08/21～09/20）

2021年08月19日14時30分 大阪管区气象台 発表		
向こう1か月 08/21～09/20	天候	近畿日本海側では、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。近畿太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	日照時間	日照時間は、近畿日本海側で平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目 08/21～08/27	気温	1週目は、平年並の確率50%です。
2週目 08/28～09/03	気温	2週目は、平年並の確率50%です。

### 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）



# I. 水 稲

## 1. いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部および中部の普通期栽培における8月上中旬の葉いもちの発生ほ場率は46%（平成24%）、発病株率は9.7%（平成6.3%）であった。

② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① いもち病に感受性が高い品種（「キヌヒカリ」等）の作付ほ場では今後の気象推移に注意する。

② 常発地では次作から、いもち病に感受性が高い品種の作付けを避ける。

③ 病害虫防除技術情報第7号（8月16日発表）を参照する。

## 2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部および中部の普通期栽培における8月上中旬の発生ほ場率は21%（平成25%）、発病株率は2.8%（平成3.8%）であった。

② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生が多いほ場では、次作の伝染源となる菌核の形成が多くなる。次作は密植にならないよう注意し、防除を徹底する。

## 3. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 8月中旬の25株あたり生息密度は、県北部の普通期栽培では0頭（平成0.5頭）、8月上旬の県中部の普通期栽培では0頭（平成3.0頭）であった。

② 予察灯による8月1～20日の飛来数は、紀の川市0頭（平成4.3頭）、上富田町0頭（平成3.6頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① トビイロウンカの発生量は地域間やほ場間で大きな差があるため、ほ場毎に発生状況を確認する。なお、同一ほ場内においても発生に偏りがあり局所的に多発することから、ほ場の全体をよく観察する必要がある。

② 本種は増殖率が高いため、現在は低密度のほ場でも坪枯れ被害を引き起こす恐れがある。定期的に発生状況を確認し、1株あたり5頭以上の成・幼虫を確認したら、早急に薬剤防除を実施する。

③ 本種は株元に生息するので、薬液が株元に十分到達するように散布する。

## 4. イチモンジセセリ（イネツトムシ）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 8月上中旬の25株あたりツトム数は、県北部の普通期栽培では0（平成0.1）、県中部の普通期栽培では0（平成0.0）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 8月下旬～9月上旬に蛹化し9月中旬以降に成虫となるため、防除の必要はない。

## 5. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 8月上中旬の25株あたり被害葉数は、県北部の普通期栽培では0.1葉（平年0.3葉）、県中部の普通期栽培では0葉（平年1.8葉）であった。

② 紀の川市の蛍光灯誘殺箱による8月1～15日の成虫誘殺数は、0頭（平年5.7頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 9月以降は被害葉率が高くても減収率は低い。また、次世代幼虫の出現がないため、防除の必要はない。

## 6. 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① すくい取り調査（捕虫網20回振り）による8月上中旬の発生ほ場率および平均成虫数は、県北部の普通期栽培で75%（平年73%）、9.6頭（平年7.6頭）、県中部の普通期栽培で75%（平年80%）、2.5頭（平年7.3頭）であった。

② 予察灯による8月1～20日の誘殺数は、紀の川市98頭（過去5年の平均174.0頭）、上富田町8頭（平年11.0頭）であった。

③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 晩生品種では、乳熟期～糊熟期に薬剤を散布する。

※ 水稻害虫の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の水稲害虫の予察灯誘殺消長も参考にする。

## II. 野菜・花き

### <トマト、ミニトマト>

#### 1. 黄化葉巻病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培ミニトマトにおける8月中旬の発生ほ場率は100%（平年76%）、発病株率は18%（平年29.7%）であった。

② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。

② 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、直ちに土中に埋めるか、ビニル袋に密封して完全に枯死させてから処分する。

③ 促成栽培では、生育初期に感染すると被害が大きくなるため、育苗期の定期的な薬剤散布および定植期の粒剤処理により、感染適期である育苗期から本ぼ初期（8～10月）のタバココナジラミ防除を徹底する。また、施設開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。さらに、外張り資材に紫外線除去フィルムを使用すると侵入防止効果が高まる。

### <ダイコン、ハクサイ、キャベツ>

#### 1. コナガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① フェロモントラップによる8月1～20日の誘殺数は、和歌山市0頭（平年0.6頭）、紀の川市2頭（平年0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

## <野菜・花き全般>

### 1. アブラムシ類およびアブラムシ類媒介のウイルス病（露地野菜全般）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月中旬のワタアブラムシの発生ほ場率は13%（平年14%）、生息葉率は0.5%（平年1.9%）、モモアカアブラムシの発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率3%、生息葉率0.2%）であった。
- ② アブラムシ類の黄色水盤（紀の川市）への8月1～20日の飛来数は、27頭（平年66.7頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① アブラムシ類媒介のウイルス病は、シルバーマルチと薬剤防除を併用してアブラムシ類の防除を行う。
- ② ハクサイ等の育苗では、防虫ネットで被覆して有翅虫の飛来を防ぐ。

### 2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率は25%（平年20%）、生息葉率は1.0%（平年5.2%）、ナミハダニの発生ほ場率は13%（平年9%）、生息葉率1.5%（平年2.5%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

### 3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月中旬の発生ほ場率は13%（平年55%）、生息葉率は0.5%（平年12.5%）であった。
- ② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 促成栽培ナス等の育苗は発生ほ場の近くで行わない。また、施設の開口部に防虫ネットを展張し、成虫の飛び込みを防ぐ。
- ② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ③ 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。

### 4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける8月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率1%、生息葉率0.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

### 5. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① フェロモントラップによる8月1～20日の誘殺数は、紀の川市30頭（平年22.9頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 幼虫が中～老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢期（ふ化幼虫の集団の食害による白変葉がみられたとき）の防除を心がける。

② 抑制栽培エンドウでは、ウイルス病、鳥害や防風対策を兼ねて、は種後40～50日間寒冷紗または防虫ネットで被覆すると被害が軽減される。

## 6. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける8月中旬の発生ほ場率は0%（平年1%）であった。

② フェロモントラップによる8月1～20日の誘殺数は、和歌山市172頭（平年107.9頭）、紀の川市597頭（平年104.3頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① シロイチモジヨトウに準ずる。

## Ⅲ. 果 樹

### <カンキツ>

#### 1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における8月中旬の発生ほ場率は39%（平年42%）、発病果率は6.4%（平年10.7%）であった。

② 8月中旬の降水量が平年に比べて多かった。

③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 8月中下旬に防除できなかったほ場では、9月上旬に早急に防除を行う。

② 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

#### 2. かいよう病

(1) 予報内容 発生量（果実および夏秋梢） 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における8月中旬の春葉病斑の発生ほ場率は20%（平年30%）、発病葉率は0.4%（平年1.3%）であった。

② 8月中旬の降水量が平年に比べて多かった。

③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 罹病性品種の場合、付傷すると果実発病のおそれがある。台風の接近等で強風雨が予想される場合には、事前に薬剤散布を行う。

② 夏秋梢の病斑は翌春の主要な伝染源になるので、9月以降翌春までに防除する。

### 3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における8月中旬の発生ほ場率は11%（平成19%）、発生葉率は1.4%（平成4.2%）、100葉あたりの雌成虫数は2.1頭（平成12.9頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤を年間に2回以上使用しない。
- ② ミカンサビダニの発生が認められるほ場では、ミカンハダニとミカンサビダニの両種に適用のある有効薬剤を選択する。

### 4. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における8月中旬の果実の被害ほ場率は9%（平成26%）、100果あたりの生息虫数は0.1頭（平成0.0頭）であった。

- ② 予察ほ場（無防除）における黄色粘着トラップによる8月1～20日の誘殺数は由良町62頭（平成271頭）、有田川町57頭（過去7年の平均61頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中旬以降に有効な殺虫剤を散布していないほ場および夏秋梢の多いほ場では、9月の発生状況をよく観察し、成幼虫の生息果率が15%以上の場合は薬剤防除を行う。

## <カ キ>

### 1. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における8月中旬の発生ほ場率は、「富有」12%（平成6%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平成1%）であった。

- ② 県北部における8月中旬の発病果率は、「富有」2.2%（平成0.2%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平成0.0%）であった。

- ③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病枝や発病果がみられる場合は剪除する。
- ② 降雨が続く場合は追加防除を行う。また、台風が接近する場合は事前に薬剤を散布し、できなかった場合は台風通過後速やかに散布する。
- ③ 密植ほ場や風通しの悪い場所は発病しやすいので、ほ場内の通風・採光をはかり、薬液をかかりやすくする。

### 2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における8月中旬の発生ほ場率は「富有」47%（平成71%）、「刀根早生」・「平核無」6%（平成21%）であった。

- ② 県北部における8月中旬の発病葉率は「富有」7.4%（平成8.4%）、「刀根早生」・「平核無」0.4%（平成1.4%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に薬液を散布する。

- ② 秋季になり気温が低下すると再び病勢が増すので、二次伝染防止に努める。

### 3. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における8月中旬の発生ほ場率は、「富有」0%（平成2%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平成3%）であった。
- ② 県北部における8月中旬の発病葉率は、「富有」0%（平成0.0%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平成0.1%）であった。
- ③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。

### 4. 角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における8月中旬の発生ほ場率は、「富有」0%（平成0%）、「刀根早生」・「平核無」6%（平成1%）であった。
- ② 県北部における8月中旬の発病葉率は、「富有」0%（平成0%）、「刀根早生」・「平核無」0.1%（平成0.0%）であった。
- ③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。
- ② 本病は二次伝染を繰り返すので、10月上旬まで防除を励行する。

### 5. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における8月中旬の発生ほ場率は、「富有」59%（平成70%）、「刀根早生」・「平核無」29%（平成25%）であった。
- ② 県北部における8月中旬の寄生果率は、「富有」3.9%（平成8.6%）、「刀根早生」・「平核無」1.6%（平成1.0%）であった。
- ③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 主に果実とへたの間隙部に寄生しているので、薬液がこの部分にかかるように丁寧に散布する。

## <果樹全般>

### 1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並～やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における8月中旬のカキの被害果率は、「富有」0%（平成3.4%）、「刀根早生」・「平核無」0%（平成0.5%）であった。
- ② 紀の川市粉河の予察灯による8月1～25日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが758頭（平成620頭）、ツヤアオカメムシが151頭（平成230頭）であった。
- ③ 有田川町奥の予察灯による8月1～25日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが202頭（過去7年の平均840頭）、ツヤアオカメムシ74頭（同187頭）であった。

④ みなべ町東本庄の予察灯による 8 月 1 ～ 25 日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが 3,693 頭（平成 1,310 頭）、ツヤアオカメムシが 714 頭（平成 693 頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来時期・量はほ場間差が大きく、特に山林隣接ほ場では早くから被害が出やすい。
- ② ほ場内での発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ③ カキでは「富有」、カンキツでは収穫時期の早い極早生品種で被害が大きいため発生に注意する。
- ④ 台風通過後や強風後に一時的に飛来が多くなることもあるので、ほ場内での発生に注意する。
- ⑤ 令和 3 年 8 月 24 日発表の病害虫防除技術情報（第 8 号）を参照する。
- ⑥ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病害虫防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA 等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病害虫防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病害虫防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780